

# 炭鉱社会像の多様性へむけて

—「軍艦島」におけるヤサイブネとアキナイ—

井上博登\*

INOUE Hiroto

## Toward the Diverse Pictures of Coal Mining Communities

*Yasaibune* (Peddlers' Boats) and *Akinai* (Peddling) at Gunkanjima

The purpose of this paper is to delineate what the community was like at Hashima Colliery, a.k.a. Gunkanjima, by focusing on vegetable peddlers from Takahama, a village located opposite the colliery, to shed light on the periphery of this community. Through their peddling, there were various interactions between Hashima and Takahama involving money, goods, people, “culture,” etc.

This paper takes up their personal experiences and narratives. A perspective from the periphery of Hashima reveals that the mining community comprised not only miners but also many others including those in indirect jobs. Coal mining communities should be diversely portrayed by listening to individuals' micro history without reducing them to a simplified national history or stereotypical images and narratives.

キーワード：炭鉱 軍艦島(端島) 行商 ヤサイブネ

### 1. はじめに

本稿では、かつて「軍艦島」<sup>(1)</sup>(長崎県長崎市。正式名称は端島(炭鉱))<sup>(2)</sup>へ野菜の行商に通っていた農家女性への聞き取り<sup>(3)</sup>から「軍艦島」(端島炭鉱)と周辺村落との相互関係を考察する。

行商というひとつの型をもった商業慣行研究の蓄積は厚く、代表的なものとしては瀬川清子・北見俊夫・宮本常一らの研究をあげることができる。瀬川[瀬川1971]は、おもに専業漁民の妻が海産物を周辺農村に売りに行き、穀物類と交換するところから行商に着目した。行商は基本的に女性が行い、農民と漁民のように異なる世界に住む者の接触交渉の場として機能することを指摘した。また、具体的な身体技法として行商のさまざまな運搬方法に着目し、現在では失われた貴重な民俗を記録・分析している。全国各地の販女を取材して採訪した個別資料も、貴重な記

\* 早稲田大学大学院人間科学研究科

録となっている。

北見〔北見 1985〕は、原初的な交換方法である市と行商を交易伝承研究として包括的にとらえ、おもに伝承資料を中心にその行為の発現の場を、経済性・社会性・宗教性という観点から総合的にとらえた。隣接分野の資料と成果も援用しながら、交易の起源・歴史的展開・原初の様態・民間信仰等々に関して紙幅を割いて分析している。

宮本〔宮本 1965a; 1965b〕は、精力的なフィールドワークの経験を活かし、行商そのものの記述・分析を行っている。ここでは、行商の担い手・行商を生み出すに至った背景・交通機関の発達に伴う販路の変遷・消長などに関して記述されている。交換（換金）の方法やトクイとの関係など、行商と商売相手との関係にもふれている。

上記のように、行商研究の蓄積には厚いものがある。これらの先行研究と本研究との異同は、端的にいうならば行商という異なる社会と社会の接触領域に着目しつつも、行商そのものの民俗誌的記述や歴史・消長の記述におさまるのではなく、逆にいわば背景としての行商から「軍艦島」（端島炭鉱）とのさまざまな関係性を描くことによって、炭鉱社会の多様な側面を照らし出そうとするところである。また、従来の研究では行商の相手として農家・町場・都市などが想定されていたが、本稿ではそれらとはまったく異質の炭鉱社会を相手にした行商を取りあげること自体が、現代民俗からの炭鉱社会像構築への寄与という点で、大きく異なっている（後述）。

つまり、本稿の目的は、行商そのものの記述・分析にあるのではなく、行商が取り結ぶ関係性を背景として、炭鉱社会の記述・分析に新たな側面を提示することである。

現在の日本に於いて、現役の坑内掘り炭鉱は釧路コールマイン株式会社のみとなり、文字通りの意味で炭鉱の民俗学的研究を行うにはすでに時遅しと言わざるをえない<sup>(4)</sup>。しかし、逆に閉山から数十年～数十年を経た現在、北海道から九州まで日本のあちらこちらの旧産炭地において、関連施設から写真・手記などの記録、人々の記憶までを含めた炭鉱にまつわる事象を保存・活用しようとする動きが活発化している。このような状況下において、現在ほど、かつて炭鉱と実際に関わりをもっていた人々の話を聞き、旧産炭地における保存・活用の現代的文脈と照らし合わせながら「現代の民俗学」として炭鉱研究を行うことが要請されている時代はないであろう。

これまで日本の炭鉱研究ではおもに労働史・労使関係史や社会学の分野で多くの研究蓄積が積み上げられてきた<sup>(5)</sup>。それらは、炭鉱の賃金制度や労務管理システム、大多数をしめる鉱員層の分析に力点がおかれたものであった。それはいわば、研究関心を炭鉱の中心的性質そのものか内部に限定し、炭鉱社会をひとつの閉ざされた空間・システムとして前提する指向性を帯びていたともいえるだろう。

しかし、炭鉱は炭鉱の本体（それは鉱員と会社、およびそれらの作り出す諸関係性に代表される）だけで維持運営されていたのではない。炭鉱には炭鉱周辺産業があり、炭鉱を代表する鉱員の生活を支えるために多種多様な周辺産業従事者の営みがあった。本稿ではとくに端島炭鉱の台所を支えていた<sup>(6)</sup>、生鮮野菜を中心とする行商に着目する。このような周辺的でミクロな視点から炭鉱にアプローチすることにより、従来の全体的な視点からは捨象されがちであった炭鉱の多様な側面に光をあて、周辺社会との多様な関係性を浮かび上がらせることが可能となる<sup>(7)</sup>。

## 2. 「軍艦島ブーム」とナショナル・ヒストリー

近年の「廃墟ブーム」の影響もあってか、これまで「軍艦島」へ一定の社会的関心が注がれてきた。2009年4月22日の観光上陸解禁<sup>(8)</sup>以降それは「軍艦島ブーム」とでもいうような爆発的盛り上がりを見せている。しかし、単純に「軍艦島」への社会的関心が高まることによって、炭鉱としての多様な側面への関心や理解が高まるというほどことは単純ではない。

近年の「軍艦島」への社会的関心の高まりを牽引している要因のひとつとして、「九州・山口の近代化産業遺産群」<sup>(9)</sup>のユネスコ世界遺産への登録を目指す活動があげられる。そこで語られているのは、江戸時代末期から戦後にかけての長い期間にわたる九州の各地を舞台とした日本近代化へのプロセス・貢献という大きな物語（マスター・ナラティブ）である。一見「廃墟」にみえたり意味付けの難しい産業遺産は、この「日本の近代化を牽引し支えた」という誰もが肯定的に受けとめるであろうストーリーを付与された瞬間、価値を与えられ保存すべき「産業遺産」として輝きを放ち始める<sup>(10)</sup>。「日本の近代化」にも時代や地域、業種ごとに相当複雑な経路があったはずだが、この大きな物語（マスター・ナラティブ）が唱えられた瞬間に、具体的な差異は省略されナショナル・ヒストリーが立ちあらわれる。

「軍艦島」のガイドクルーズや上陸ツアーでの説明において、この「日本の近代化を牽引し支えた」という要素は重要な位置をしめている。しかしながら、このナショナル・ヒストリーによって語られ想起される炭鉱社会像のなかには、本稿が着目する炭鉱という重厚長大産業の影に存在していた周辺的でミクロな、個人個人の多様な生のあり方は含まれていない。

「軍艦島」への社会的関心が高まるなか、かつて対岸の村落から毎日小船に乗って野菜の行商に従事した人々がいたというマイクロ・ヒストリーとしての「歴史／経験」は依然として忘却の彼方にある。

## 3. 「軍艦島」と高浜

### (1) 調査地概況

長崎県長崎市高浜町は長崎市内中心部から南西に伸びる野母（長崎）半島の西海岸沿いに位置し、「軍艦島」（端島）ともっとも至近距離で向かいあう村落である。海岸線からは「軍艦島」の島影をはっきりと認めることができ、独特の景観を呈している。従来、端島炭鉱ともっともつながりの深い村落は高浜であった。

先述した野菜の行商や高浜から端島への入籍（炭鉱に就職すること）、端島からは島内の住宅が足りなくなったときに高浜に住んで端島へ通勤したり、夏には高浜の海水浴場へ集団で泳ぎにきたりというように相互に

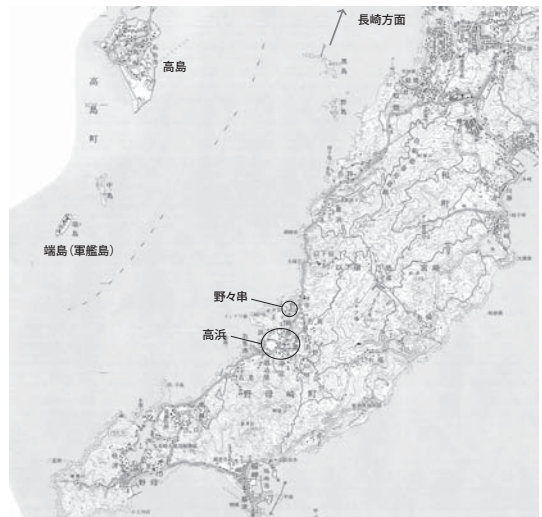


図1 調査地位置

戦後動力船が導入されるとヤサイブネは野々串から出港した。高島には高島炭鉱があった（1986年閉山）。

出典：国土地理院 5万分の1地形図「野母崎」

関係性を結んでいた。

高浜の総戸数は434戸（2000年）<sup>(11)</sup>、生業はかつては農業が主で零細な漁業を組み合わせる家もあった。また、運送船や砂船といって港の護岸・築港工事に必要な砂利を採取する仕事（船）があり、高浜の若い男性は学校を出るとこれらの船に乗り込むこともよくあったという。現在は農家数が減少し、長崎市内までの交通状況も改善されているため、自家用車で市内に通勤する人もいる。

平地が少なく、耕地は野母（長崎）半島の脊梁山地側に点在している。高浜本村の平地や隣の集落である古里の棚田等を除いて水稲耕作は行われず、もっぱら畑作でキュウリ・トマト・ハクサイ・ナス・ダイコン・スイカ・サツマイモ・ジャガイモ・サトイモなどといった端島炭鉱でのアキナイ用の野菜を生産していた。戦前は、浜添や古里のように浜に面した集落から木製の手漕ぎ船で三々五々アキナイに通っていたが、戦後になって中型の動力船が登場すると集落からはやや離れた野々串の港に一旦集まってからまとめて通うようになった。

## （2）ヤサイブネとアキナイ

高浜では、端島炭鉱へ行商に行くことを「アキナイ」、乗る船を「ヤサイブネ」と呼んでいた<sup>(12)</sup>。ヤサイブネは、海が時化て端島の棧橋へ接岸できないときを除いて毎日出た。船は毎日出るが、アキナイに行く人は必ずしも毎日行くわけではなく、人によって数日おきに行っていた。農家女性が従事し、母娘で乗船してアキナイのコツを教えてもらうこともあったという。

朝7時くらいに出発し、昼過ぎには積み込んだすべての野菜を売り切り、端島の食堂で昼食を食べて帰ってきたという。端島には港がないため棧橋への接岸が難しく、船の乗り降りには危険が伴ったようで実際に乗り降り時に海中に落下してしまった人もいた。そのようなこともあり、ヤサイブネでのアキナイは重労働で、気の強い女性でなければつとまらなかった。

端島のアキナイでよく売れるためには、さまざまなコツがあったという。

たとえば、端島では社宅と社宅の間の路上で販売するのだが、場所によって売れる場所と売れない場所があるのでまずはじゃんけんをして場所取りからはじめていた<sup>(13)</sup>。また、安定的な売り上げを確保するためにはお得意さんを作る必要があった。この点で、端島炭鉱に血縁関係者が居住している場合には、強力なお得意さんとなり売り上げの安定に寄与したという。端島炭鉱で野菜を買いにくるのは当然鉱員の妻たちであり、炭鉱の「奥さん」連中であった。

高浜の農家女性が困難な思いをしながらもヤサイブネに乗って端島へアキナイに行っていたのは、なによりも現金収入のためであった。当時の高浜ではほとんど現金収入の機会はなく、一方端島炭鉱は地域のなかでは例外的に現金の使用が普及していた社会だったのである。かつてのアキナイ従事者からは、アキナイで子どもを学校にやることのできた、アキナイで家を建てた、という類の手柄話をしばしば聞くことができる。

表1 高浜の総戸数・総農家数・非農家数

年次	総戸数	総農家数	非農家数
1970	316	197	119
1975	-	161	-
1980	368	163	205
1985	-	168	-
1990	412	131	281
1995	-	91	-
2000	434	69	365

農林水産省 2000年世界農林業センサスをもとに作成。

#### 4. さまざまな相互関係

「軍艦島」(端島炭鉱)にとって野菜の供給源であった高浜と、高浜にとって現金収入源であった端島炭鉱は、それに留まらずさまざまな相互関係で結ばれていた。

以下では、おもにカネ・モノ・ヒト・「文化」における両者の相互交流のあり方をみていく。それは、炭鉱周辺から個人個人のミクロな経験に視点をあてることによって、閉鎖的で固定的な構造をもつ一枚岩的存在として描かれてきた炭鉱社会を、その境界面から解きほぐし多様で雑多な関係性のなかに再定位する試みである。

##### (1) カネを介した相互関係

まず、高浜と端島炭鉱間の関係でもっとも重要なものは「カネ」を介した相互関係であった。

先述したように、高浜の野菜はヤサイブネに乗せられて端島炭鉱へ運ばれ、路上販売されることによって換金された。高浜からは野菜が、端島からは現金(カネ)が流れ出ていたといえる。

端島へのアキナイによって得られた現金収入は、子どもの教育や家屋の新築や補修、新たな事業などへの投資を可能にした。また、当然それは日々の生計を助け、ライフスタイルへの影響をもたらした。端島炭鉱閉山から35年が経過した今日でも、高浜の人々にとって端島は大きな恩恵を与えてくれた島として認識されており、それは端的には(高浜にとって)「端島は宝の島じゃった」という類の語りにあらわれている。以下、具体的な語りの事例をあげながら検討していく。

〔事例1〕 私は娘盛りのころ、アキナイに行くのが恥ずかしかった。ヤサイブネでアキナイに行っているのは所帯持ちである程度の年齢の人ばかりだった。しかし、父と2人暮らしで百姓だったので、現金収入を得るために3年間ほどアキナイに行った。(Aさん・1934生)

〔事例1〕は海沿いの集落に住むAさんの言である。早朝からの出荷準備と連日の端島通いは嫁入り前の娘には苛酷で、娘の仕事ではなかったが、母の死後家計を支えるために嫌々ながらもヤサイブネに乗り込まざるをえなかった。

〔事例2〕 その頃は野菜を作るのが楽しみだった。持ってさえいけば金になったから。あの時分が一番楽しかった。あの時分が百姓をしていて一番よかった。作る甲斐があった。余計に作っても全然残らなかった。全部売れてしまった。(Bさん・1923生)

〔事例2〕は当時の端島におけるアキナイの実態を端的にいいあらわしている。およそ炭鉱以外の生産機能をもたない端島にとって、生活に必要なあらゆる物資は島外から搬入するほかはなく、野菜もその例に漏れなかった。つまり、恒常的な野菜の欠乏状況<sup>(14)</sup>のなかにあって高浜からのアキナイはいわば強度の売り手市場の関係にあり、「作って持っていく側から全部売れてカネになった」のである。朝から販売をはじめ、昼過ぎにはすべて売り切ってしまうことが多かったという。この「儲け」の感覚は野菜の「作り甲斐」へと還元され、「楽しみ」へとつながっていった。

〔事例3〕 端島には正月前から泊まりがけで餅つきに行った。臼・杵を高浜から持っていっ

て、餅米は端島の人が各々持ち寄ってやった。搗きに行くといくらか日当がもらえてその額が良く、そのまま正月の費用にあてた。搗いただけ金になった。（Cさん・1930生）

〔事例3〕はまた別の形での「儲け」の発見をいいあらわしている。限られた空間を炭鉱の生産機能に特化させていた端島では、釜・蒸籠・杵・臼など餅つきに必要な道具がなく、本格的な搗き手もいなかった。しかし、正月には餅つきくらい楽しみたいというニーズはあり、その需要を高浜からの道具と労力で満たしたのであった。餅つきも上記のアキナイと同じく売り手市場で、正月に餅を搗くという高浜では決してカネには還元されない行為が、端島に行くことによって「意外な儲け」を生み出した。その儲けはすぐに高浜での正月の費用として消費された。

炭鉱と村落という成り立ちの背景を異にするふたつの社会は、海を越えた関係性によって結びつけられ、そこに異なる位相のものを交換する「場」が現出したのである。この「場」（もしくは「経路」と呼んでもいいかもしれないが）を通じて高浜にもたらされたものの代表的なものがカネであった。

## （2）モノを介した相互関係

端島から高浜へはさまざまな「モノ」ももたらされた。それは、先述したように端島から得たカネで端島の店で買うという経路を辿ることもあれば、カネの交換ではなくヒトのつながりからもたらされたモノもあった。

〔事例4〕炭鉱勤めは金回りがいいから洗濯機などいろいろ買っていて、「また買うから姉さんにやるけん」といつてくれた。当時、高浜では珍しかったオルガンなどなんでもくれた。もらったものはヤサイブネに乗せて運んだ。（Dさん・1932生）<sup>(15)</sup>

ここで注目すべきは、まず月給を現金でもらう端島炭鉱社会があり、その特徴として洗濯機・テレビ・冷蔵庫といった大型家電製品を比較的短期間で買い換えるという「文化」が下地になっていること。さらに、端島に高浜出身の血縁者がおり人的ネットワークがあること、そしてヤサイブネでのアキナイに従事しており、船を使って物資を運搬できることという複数の要素が満たされてはじめて端島から高浜への珍しいモノの移動が可能になったということである。

当時の炭鉱は稼ぎがよく、端島では昭和30年代には多くの世帯で洗濯機・テレビ・冷蔵庫が買いそろえられていたという。また、競争意識による購買意欲が高く、これらの家電製品の最新製品が発売されると競うようにして購入したというエピソードもあり、家電の買い換え頻度は高かったと思われる。そして、上記の複数の要素を満たしていた場合には、端島から高浜へおおよそそれまでの村落生活では縁のなかったモノたちが流入することになる。

これらのモノたちは、当然ながら高浜での生活に影響を及ぼしていった。

〔事例5〕母はヤサイブネで端島へ行っていた。母はお土産にパンやお菓子などを買ってきてくれて、弟と3人で大喜びして食べていた。端島にはいいものがたくさんあり、母が商売で得たお金で食べ物を買ってきてくれるのが楽しみだった。田舎の子どもはおやつには芋しか食べていなかったから、パンが珍しくて喜んでた。母親がアキナイから戻ってくると、

どこの子どもも船着き場で待っていた。(Aさん)

アキナイで得たカネを、農家女性がその場で端島の店で使い、高浜では手に入らないモノと交換してくることもあった。アキナイに従事している女性は年齢的に子持ちのことも多く、子ども用に菓子パンやお菓子・リングなど当時の高浜では手に入りにくいモノを買って帰り、子どもに大層喜ばれたという話をしばしば聞く<sup>(16)</sup>。

またアキナイは昼過ぎには完売して一段落つくため、ときには端島の鉦員食堂でチャンポンなどを注文し外食することもあったという。この昼過ぎの外食は、早朝からの重労働から解放され、高浜にはない「お店」で家事にも縛られずに同僚と談笑できる楽しい時間として経験されていた。

これまでみてきたように、高浜と端島の間にはモノを介した相互関係もみられたが、これは機械的に端島から高浜へとモノが流入する過程ではなく、血縁関係に代表される人的ネットワークやヤサイブネを使ってモノを運搬可能かどうかといった潜在的資源の有無と、それを活用できるか否かによって可能となる事象であった。当然、それらの潜在的資源を保有する人から先に端島からのモノを所有することができ、高浜の村落社会とは異質の経験を享受することが可能になったといえるだろう。

「モノ」は「経験」へとつながり、経験は「楽しみ」を喚起し、それは「楽しかった記憶」として記憶化される。個々人の記憶はそれぞれの経験の違いによって濃淡があるが、総体的にみて高浜からみた端島の記憶は村落生活とは異質の「楽しみ」や「儲け」をもたらすものとして、ある種日常生活に新鮮な亀裂をもたらすものとして好意的に認識されていたといつてよい。

### (3) 「文化」・ヒトを介した相互関係

これまでカネやモノの側面から高浜と端島炭鉦(「軍艦島」)の関係性をみてきたが、それは一種の村落と都市間の関係性に類似している。当然両者の間には異なる生活スタイルが存在しており、お互いに向けあっているまなざしの性質も異なる。[事例 6a]はそのような生活スタイルや「文化」の違い、まなざしの違いを端的にあらわしている。

[事例 6a] 炭鉦の奥さんたちはきれいだった。そこはもう人口密度も高いし、三菱関係で水道や電気がタダだった。私たちのような(高浜の)娘は羨ましくて、「高島や端島の人はいいな」「いつ逃げ出そうか」と思っていた。まだ娘で炭鉦がどんなに汚い職業かわからなかったし<sup>(17)</sup>、アキナイに行くとき、奥さんたちが買い物袋をさげている姿を高島や端島で見ている「こんな仕事がいいな」と思っていた。(Aさん)

[事例 6b] 百姓でいるよりは嫁に行った方がましかな、ゆとりがある生活の方がいいな、と結婚することにした。百姓もやりたくないし、アキナイも行きたくなかった。漁師からも結婚の話があったが、もうサラリーマンのところに行く決めていた。その頃から、このあたりの百姓はきついと目覚めていたし、炭鉦ならまだいいかと飛びついていった。(Aさん)

当然高浜と高層の社宅が建ちならぶ端島とでは人口密度や居住形態はまったく異なっていた<sup>(18)</sup>。端島炭鉦では女性の働き口が限られていたこともあり、鉦員の妻には専業主婦が多かった。アキナイの野菜を買いにくるのはそのような「奥さん」たちであり、高浜の娘たちは服装や化粧<sup>(19)</sup>

や家庭での役割が自分たちとは大きく異なっている炭鉱の「奥さん」たちに憧れのまなざしを向けていたというのである。

さらに、端島には炭鉱に特徴的な福利厚生設備があった。それは、当時であれば近代的な建築の社宅とそこでの生活基本料金の大幅な免除という制度であった。そして、部屋のなかにはテレビや冷蔵庫といった当時の先端をゆく家電製品がそろえられていた。

やがて、早く高浜を抜け出して鉱員の奥さんにでもなりたいたいと考えていた〔事例 6a〕の A さんは、端島の隣にある高島炭鉱の鉱員のもとへ嫁ぐことになる。そのほかにも、〔事例 4〕の D さんの妹など、高浜から端島炭鉱や高島炭鉱へ嫁いだ女性は一定数にのぼる。端島へ嫁いだ女性とはアキナイなどを通じて頻繁に交流が保たれ、そこから〔事例 4〕でみたように家電製品やオルガンなど従来高浜では普及していなかったモノがもたらされるようになる。

村落を出て炭鉱へアキナイに通うということは重労働に違いなかったが、それと引き換えに高浜に異なる生活スタイルや服装などの情報をもたらし、それは炭鉱への憧れのまなざしを形成していった。さらに、日常的な人的交流と憧れのまなざしのなかで、たとえば安定して高月給の鉱員との婚姻を望むような素地も整えられ、婚姻と移住を通じた一定の割合の通婚圏が形成される。通婚関係は、やがて人的交流に留まらず端島から高浜へのモノの還流となって循環するのである。

ここでは、生活スタイルや服装などの「文化」、憧れのまなざしに代表される認識が高浜と端島の間でやりとりされ、それがたとえば通婚という具体的な事象ともつながっている有様を指摘することができる。

## 5. むすび—オルタナティブな歴史の証言としての民俗

本稿では、高浜から「軍艦島」（端島炭鉱）へ野菜のアキナイに通った農家女性への聞き取りをもとに、高浜と端島炭鉱の間におけるさまざまなレベルの相互関係を描き出した。「軍艦島」の操業時、炭鉱には周辺村落から毎日ヤサイブネに乗ってアキナイに通った女性たちがおり、彼女たちを媒介としてさまざまなカネ・モノ・ヒト・「文化」の相互交流が行われていた事実を、多様な炭鉱社会像のささやかな一事例として記した。

石炭の生産機能とそれを請け負う鉱員層のみに重きを置く、硬直化し単一化された炭鉱社会像はいつしか易々とナショナル・ヒストリーへ奉仕する機能至上社会の像へと純化され、従来その周辺に息づいていた多種多様な生の営みをそぎ落とし、忘却していく。

たしかに、炭鉱社会においてその中心を担っていたのは圧倒的多数の鉱員層であり、その生活様式や文化であった。また、それに伴う労働組合の活動や労使関係、労務管理や賃金体系、採炭機構の技術革新等々が炭鉱を炭鉱たらしめていた中心的な要素であることは論をまたない。これらの炭鉱独特の諸要素・諸制度は、やがて炭鉱町のみからなる「地域社会」理念や炭鉱を家族としてとらえる「一山一家主義」の論理を形成した〔市原 1997: 184-187〕。

しかし、日本から炭鉱の灯が消え炭鉱での労働経験者が高齢化するなかで、炭鉱なるものの経験と記憶に対する記録・再記憶化の要請は日々高まっているといえよう。それは、旧産炭地の自治体の多くが財政運営に塗炭の苦しみを舐めている現在、多額の補助金をつぎ込んでいわゆるハコモノ施設を乱立させ失敗した過去を反省し、逆に旧産炭地という来歴を活かした地域活性化政策が模索されている現状を鑑みても共感できることである。

その際に、まず上述した炭鉱の中心的な要素を重視するのは当然であるが、同時にそれに留ま



らず炭鉱周辺との多様な関係性にも目配りが必要であろう。それはなによりも、炭鉱をめぐる単一で固定化された語りを相対化し、多様な関係性のなかにあった炭鉱社会を立体的に描くことを可能にする。個人個人のミクロな相互関係のあり方を描くことによって、ともすると炭鉱に対する「典型的な語り」<sup>(20)</sup>や「偏見や誤解にもとづくイメージ」に陥ったり、すべてが最終的に単純化されたナショナル・ヒストリーに回収されてしまうという状況に対し、ささやかではあるがひとつの可能性としての「もうひとつの」炭鉱社会像を提示することができるのである。

## 註

- (1) 長崎港から西南約18kmの洋上に位置する元海底炭鉱の島。鉱区は端島直下1,000mを超える海底に数km<sup>2</sup>に渡って層状に存在し、最盛期(1941年)には年間41万tを超える出炭量をみた。大規模な鉄筋コンクリートアパートが建設されるに伴って島内人口も増加し、最大人口を要する昭和30年代頃には人口が5,300人を超え、人口密度が1haあたり1,400人を超す世界有数の超高密度人口の島となった。1974年1月閉山。操業時には小さい島内に「ゆりかごから墓場まで」の生活に必要なあらゆる施設が存在しており、島内でひとつの完結した生活空間が用意されていた。
- (2) 以下、文脈により「軍艦島」と端島(炭鉱)の両者を適宜使いわける。正式名称は端島(炭鉱)であるが、とくに外部からの観光上陸などの文脈では「軍艦島」と呼ばれることが多い。
- (3) 調査は2008年8～9月、12月にかけて行った。
- (4) 筑豊の炭坑民俗を記録した数少ない作品としては、たとえば[山本1985;上野1967]など。
- (5) 炭鉱労働史・炭鉱労使関係史分野では隅谷三喜男・荻野喜弘・田中直樹・村串仁三郎などの著作、社会学分野では[布施1982;武田ほか1963]が古典的かつ代表的である。とくに前者では炭鉱の中心を取り扱っている。
- (6) もっとも炭鉱では、会社直営の購買店や労組管轄の生協などが設置されており、日用雑貨から食料品までこれらの施設で購入することができた。当然端島炭鉱にもこれらの店舗はあったのだが、生鮮野菜に関しては対岸の高浜から運搬する方が早く新鮮でおいしい野菜が仕入れられたため、高浜からのアキナイによる路上販売で購入する人が多かった。
- (7) この試みは従来の炭鉱そのものの研究成果を否定するものではない。むしろこれまでに蓄積された分厚い成果の延長線上に位置すべき視点であり、その点では従来の研究成果に新たな切り口を提示するものである。
- (8) 「軍艦島」の所有者である長崎市が船を使った上陸ツアーを許可。複数の船会社や旅行代理店が参入している。公開半年で上陸者は3万人に上っている。
- (9) 九州および山口県内にある日本の近代化に寄与したとされる文化財や史跡等の総称。江戸時代末期から戦後にかけてこれらの産業遺産が日本の近代化に大きな役割を果たしたというストーリーが特徴的で、現在ユネスコ世界遺産(文化遺産)の暫定リストに掲載されており本登録へむけての活動が行われている。「軍艦島」は「端島炭坑」として、その構成資産に入れている。
- (10) 筆者は一連の「九州・山口の近代化産業遺産群」のユネスコ世界遺産への登録を目指す活動に対して批判的であるのではない。むしろ、これまで単体では保存が困難であった各地の産業遺構に保存の可能性を示し、地域間の連帯と協力、人的ネットワークを作りあげている功績は大いに評価すべきであろう。地域間ネットワークの母体としては、九州伝承遺産ネットワーク(<http://www.kyusyu-densyouisan.net/>)があげられる。
- (11) 農林水産省2000年世界農林業センサスより。なお、出口・古里・浜添・蔭平・山明・大野・越地・

北野々申の各農業集落の値を合計して「高浜」の値とした。

- (12) 人によっては隣の高島炭鉱へアキナイに行っていた人もおり、また時化などの状況によって行き先が高島へ変更になるときもあった。船は同一の船で、端島・高島を順に回っていた。
- (13) ひとりならびで路上販売の棚を出すのだが、よく売れるのは両端、真ん中は売れにくかったという。
- (14) もちろんこれは野菜に限らずあらゆる物資に共通することであったが、生活のまず根源的な基盤としての食に対する希求はかなり強かったと思われる。端島ではとくに夏の台風の季節と、北西風で海が荒れる冬季には数日間に渡って船が欠航することがしばしばあり、そのようなときには島中の店で食料品が売り切れ、蓄えておいた保存食で数日間を食いつなぐこともあったという。
- (15) Dさんの妹は端島の鉱員のもとへ嫁いでいた。Dさんが端島へアキナイに行くと、この妹がお得意さんになって野菜を買ってくれたという。
- (16) 当時の高浜では子ども用のおやつとしてはサツマイモが主流であり、菓子パンなどは非常に珍しがられた。昼過ぎにヤサイブネが港に帰ってくると、母恋しさと菓子パンなどの「おみやげ」がうれしくて子どもが待ちかまえていたという。
- (17) 坑内に潜って身体が炭塵などで黒く汚れること。
- (18) 端島の人口密度は東京の約9倍、人口は最大で5,000名強であった。住居は三菱鉱業の提供する社宅で、居住地区の面積が限られていたため高層アパートが林立する独特の景観を呈していた。社宅における生活基本料金（家賃・電気・ガス・水道代）は極めて廉価に抑えられていた。
- (19) アキナイ女性の服装は、モンペに前掛け頭には手拭いかタオルを巻きつけるといった和風の作業着のようなものであった。一方、端島炭鉱の専業主婦は化粧をして洋服に手提げバッグという格好がよくみられた。
- (20) 「炭住や長屋での生活は隣近所で家族同然の親密なつき合いをしていた」とか、「家賃・電気代・ガス代・水道代などがほとんどかからず住みやすかった」とか『「一山一家」の精神で団結力が強い』といった類のもので、基本的に炭鉱での生活を肯定的に語るもの。端島炭鉱の場合も元住民からはこれと類似した「典型的で肯定的な語り」を多く聞く。また、近年端島炭鉱（「軍艦島」）が世間から注目を浴びるなかで、TV・新聞などのマス・メディアによってこれらの典型的な語りが生産され流通している。

## 文献

- 市原 博 1997『炭鉱の労働社会史—日本の伝統的労働・社会秩序と管理』多賀出版
- 上野英信 1967『地の底の笑い話』岩波書店
- 北見俊夫 1985『市と行商の民俗—交通・交易伝承の研究 2』岩崎美術社
- 瀬川清子 1971『販女—女性と商業』未来社
- 高橋伸一編 2002『移動社会と生活ネットワーク』高菅出版
- 武田良三ほか編著 1963「炭鉱と地域社会」『社会科学討究』22・23
- 野母崎町企画課編 1986『野母崎町郷土誌』野母崎町
- 布施鉄治 1982『地域産業変動と階級・階層』御茶の水書房
- 三菱鉱業セメント株式会社総務部社史編纂室編 1976『三菱鉱業社史』三菱鉱業セメント株式会社
- 三菱鉱業セメント株式会社高島炭鉱史編纂委員会編 1989『高島炭鉱史』三菱鉱業セメント株式会社
- 宮本常一 1965a「振売と流し職」『生業の推移 日本の民俗 第3巻』河出書房新社
- 宮本常一 1965b「身売から出稼へ」『生業の推移 日本の民俗 第3巻』河出書房新社
- 山本作兵衛 1985『筑豊炭坑絵巻』葦書房